
その理由

蒼色 2 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その理由

【Nコード】

N7220F

【作者名】

蒼色2号

【あらすじ】

ある日、コナンは哀がピアスホールを開けていることに偶然気づき、ピアスをプレゼントしようと思い付いた。そして、ピアス選び始めた頃から自分の中に疑問・違和感が存在することにも気づき始め……。コナンが自分でも理解できない言動をする理由とは？※あらすじとキーワードを変更しました。

01 ピアスホール（前書き）

初めまして。この先には――コ哀及び新志要素有・小説とは程遠い、ドシロウトの妄想の文字化・もしかしたらキャラクターのイメージ崩壊？・事件や推理は一切無し――というモノがあります。「無理だ！」と思ったら、無理に進まないで下さいね。

01 ピアスホール

十一月下旬。

子供は風の子。少年探偵団の面々は、寒さなんてお構いなしに公園で遊んでいる。

「歩美、光彦待てーっ！」

「キャーッ！」

「待ちませんよ、鬼ごっこなんですからっ！」

現在、元太が鬼で鬼ごっこをしている真っ最中。

「コナン君！ 哀ちゃん！ すぐ助けるからね！」

「させるかっ！」

「ほーら元太君。こっちですよー」

「こら待て光彦っ！」

「うわぁー」

歩美と光彦は元太から巧みに逃げている。と言うよりは、元太の足が遅くてなかなか追い付けないだけなのだろう。

「子供たちは元気ね」

「ハハハ……。一応俺らもガキなんだけどな」

やる気のないニセ小学生の二人は早々と捕まり、三人の様子を見守っていた。

「捕まったのはいいけど、動かないと寒いわね」

「ああ、今日はだいぶ冷えるな。元太のヤツ、早くあいつら捕まえ

てくんねーかな」

三人は走り回っているので汗をかいている。皆、特に元太はだいぶ疲れてきた様子。

「ってあれじゃ捕まりそうにないよな」

「終わるのはまだ先ね」

「元太が諦めたら終わるだろ」

「早く諦めてほしいわ」

二人がそんな会話をしていた時、五人を突風が襲った。

「うおおっ！」

「キャーッ！」

「うわっ！」

三人の動きが止まった。元太は立っていたが、歩美と光彦はその場に蹲ってしまった。

一方、三人を見守っていた二人は。

「キャッ！」

「ん？」

コナンは、珍しく可愛い声を上げた哀のほうへ振り返った。風が哀の髪を乱した時、コナンはあることに気付いた。

「あっ！」

「何よ？」

「お前、耳……」

「耳がどうしたのよ？」

コナンは哀の耳たぶを指差した。

「穴……」

「もしかして、ピアスホールのこと？」

哀は答えながら自分の耳たぶを触った。

「おう。穴開けてたんだ」

「そうよ。悪い？」

「別に悪かねーけど、そーゆーの興味あったんだって思っただけ」
「そう……」

その頃、鬼ごっこに異変が起きていた。

「よっしゃーっ！」

「あーあ、捕まっちゃった」

「やられましたー」

元太は蹲った二人をあっさり捕まえたのだ。三人は、すでに捕まっていた二人の方へ歩きだした。

二人は、それに気付かず話を続けている。

「これはお姉ちゃんの仕業なの」

「明美さんの？」

哀は、切なげな表情で耳たぶを弄っている。

「ええ。お姉ちゃんが、前に自分が開けた時、お揃いのピアスをし
ようって言って、私にも開けさせたのよ」

「……」

「いつか幸せになれるようになって、願掛けだって言っていたわ……」
「願掛け、か……」

なんとなく暗い雰囲気になったところへ、三人が到着した。

「へっへっへっ、全員捕まえてやったぜ！」

「悔しいです……」

「うん、悔しいねー！ でも、おもしろかったよね。……って、どうしたの？」

「もしかして、疲れちゃいましたか？」

こんな時、この二人は敏感だ。逆に。

「こいつらが疲れるわけねーじゃん。ずっと捕まってる、動いてねーんだからよお」

元太は鈍い。

「ハア……。小嶋君、待ちくたびれるって言葉もあるのよ」

「そーゆーこった。動けねーから、寒くなっちゃったよ」

哀は両手を広げて肩をすくめ、コナンは自分の体をさすってみせた。

「そうですね。僕達が早く助けられればよかったんですけど……」
「ごめんね……」

光彦と歩美は、しゅんとしてしまった。

「な、なんか俺、悪者じゃねーか？」

元太は落ち込む二人、特に歩美を見て動揺してしまった。

「いや、そんなことねーって。捕まったのは自分なんだから」

「そうよ、謝るようなことじゃないでしょ。遊びなんだし」

二人の言葉で、三人は少し元気を取り戻した。

「そろそろ帰ろうぜ。辺りが暗くなる前に。な？」

コナンがそう言うと、もう少し遊びたかった三人は、また明日も遊ぶ約束で手を打って、明るい別れの挨拶を残して帰っていった。

コナンと哀は途中まで帰り道が一緒だ。しばらくは無言で歩いてしたが、ふとあることを思い出したコナンが口を開く。

「なあ」

「何？」

「ピアス。願掛けってことはさ、お揃いのピアスしてなきゃ意味ねーんじゃないの？」

「そうかもしれないけど、そのピアスは、幼児化して逃げる途中で無くしちゃったし……」

哀は、立ち止まり俯いてしまった。コナンは掛ける言葉が見つからず、じっと哀を見つめていた。

しかしそれは数秒のこと。哀はすぐに顔を上げ、前を見据えて歩きだした。

「それに、小学生が普段からピアスなんてしていたら目立つし、わざわざそんな余計な物を買うお金が勿体ないわ」

「そっか……」

それっきり、言葉を発せず遠い目をして歩いている哀を見て、コナンはある一つの決心をした。

01 ピアスホール（後書き）

こんなモノを読んでいただき、ありがとうございます。酔った勢いで暴走した妄想を文字化してしまい、今回晒してみました。

02 ピアス選び（前書き）

一部修正しました。

02 ピアス選び

哀のピアスホールに気付いた日以来、コナンには日課が一つ増えた。誰にも知られないように密に行っている。

「あー、クソッ」

これは独り言。

「どんなんがいーんだよ……」

これも当然独り言。周囲には誰もいないから、思ったことがつい口から出てしまうようだ。

「似合う似合わないの前に、人には好みってのもあるしな……」

ブツブツ言いながら、携帯電話を操作している。画面に映し出されているのは、ショッピングサイト。その中の、アクセサリーのページを行ったり来たり。

「それにしてもピアスっていろんなのがあるんだな。つーか灰原ってどんなんがいーんだ？ さっぱりわかんねー」

そう。コナンは哀にピアスをプレゼントしようと、日々品定めを勤しんでいたのだ。

「……やめた。また明日にしよう」

コナンがピース選びを始めてから数日が経った。その間は、特に変わったことがあるわけでもなく、穏やかに過ぎていた。

「さて、と。ピース、ピース」

時節的にクリスマス商戦に突入したのだろう。サイトに掲載される商品数が極端に増えた。

「これじゃあ、ますます迷っちゃうじゃねーか」

コナンは、今日も日課に没頭していた。

「でも早く決めねーと。なんか気になって落ち着かねーし……」

最近のコナンは、何をしていてもピースのことが頭から離れない。

「……っーか俺、なんでこんなに気になってんだ？」

変わったことは、あったのかもしれない。

「ま、いっか」

コナンは疑問を解決することなくピース選びを続けた。

十二月も中旬に入った。今日はとてつもなく寒い。そんな日の、子供たちの下校途中。

「うー、さみーな」

元太が皆に共通する思いを口にした。

「今日はこの冬一番の寒さですからね。関東以外、日本中大雪らしいですよ」

「えーっ！　なんでこの辺は雪降らないのー？」

三人の後ろを歩いていたコナンが、歩美の疑問に反応する。

「関東地方は山に囲まれてて、雪雲が山を越えらんねーんだよ。だからこの辺には、なかなか雪が降らねーんだ」

その隣を歩いていた哀は、軽く溜め息を吐いた。

「降らないほうがいいじゃない。雪が降ると、交通が麻痺したり、除雪しなければならなかったり、大変でしょ？」

「確かにな」

哀の現実的な発言に、コナンも同意した。
しかし。

「でも歩美、雪遊びしたいなあ」

「おう。雪合戦とかしてーよな！」

「雪だるまとか、かまくらとかを作るのも楽しいですよね！」

この三人にとって雪が降るということは、遊びに直結する喜ばしい出来事のようなのだ。

哀は、そんな純真な子供たちを優しい顔で見つめていた。

一方、コナンは立ち止まり、自分の世界に入り込んでいた。

「雪、か……」

周りに聞こえない小さな声で呟いた。

立ち止まったままのコナンに哀が気付く。

「どうかした？」

「ん？ なんでもねーよ」

「そう。ならいいけど」

コナンはそう言ったが、本当は思い付いたことがあった。

帰宅したコナンは、すぐに部屋に籠もって携帯電話を取り出した。しばらく真剣に画面を覗き込んでいたが、やがて。

「あった！」

少し操作をした後、満足気に微笑んだ。

それから数日後、工藤邸に宅配便が届いた。ただし家人は不在。

郵便受けに入れられた不在票は、コナンが当然のように見つけた。

「お、来たな」

この荷物は、先日コナンが注文した物だ。毛利邸に届くようにしては、不審がられるだろうと配慮してのことだった。

宅配業者にさっさと電話をし、配達を依頼する。家の中から印鑑を持って出てくれば、荷物を受け取るなんてわけない。留守番をしている子供だとは思われないのだ。

「おにいさん、ありがとう！」

とびっきりのお子様スマイルでこう言えば、配達員も笑顔で帰っていく。

「さてと」

リビングで早速梱包を解いて中を覗く。綺麗にラッピングされた小さな箱を見て、思わず笑顔になった。

それを手に取り、眺めてみる。

「どうやって渡すか……」

普通に渡しに行ったら、突き返されそうな気がする。

しばらく考えていたが、これを見付けた時、クリスマスプレゼント用に売られていた商品が多かったことを思い出し。

「クリスマスプレゼントなら、受け取ってくれるよな？」

再び笑顔になり、それをリビングのテーブルに置いたまま毛利邸

へと帰っていった。

02 ピアス選び（後書き）

続きはそこそこ出来ているのですが、シラフで見たらキツイ！で、直せば直すほど泥沼に……。結局、誤字脱字だけチェックして晒していくことにしました。

03 突然の来訪者

十二月も半ばを過ぎると、世間は目前に迫ったクリスマスに浮かれている。

そうした風潮を好み、ここぞとばかりにイベントを楽しもうとする者は、誰の周りにも居るわけで……。

「クリスマスパーティー？」

例に漏れず、コナンの周りにも居た。

この日、コナンは学校から帰宅後、すぐに阿笠邸へ向かっていた。目的地まであと少しという所で、その隣、つまり本来の自宅である工藤邸の前に人影を発見した。

その人影が誰であるか理解した途端、溜め息を吐いた。そして一言溢す。

「母さん……」

そこに居たのは工藤有希子。言わずと知れたコナンこと新一の母である。

先程の溜め息は、いつも突然、本当に何の前触れもなく現れる母に対するもの。

有希子は自分の方に歩いてくる愛息に気付き、笑顔で手を振ってみせた。だが、コナンの方は呆れた表情を隠そうともせず有希子の

前までやってきた。

「新ちゃん久しぶりっ！」

言うなりコナンを思い切り抱き締める。先制攻撃を食らったコナンは、とにかく藻掻き、暴れ、なんとか離脱した。

「いきなり何すんだよっ！」

周囲に漏れないよう小声ではあるが、強い語気で自分の不機嫌を伝えた。しかし。

「だって、ちっちゃくて可愛いんだもんっ」

有希子は、そんなコナンの反応など気にせず満面の笑み。語尾に音符でも付きそうな明るさで答えた。

この人は何を言っても自分のペースを崩さない。日頃からそう感じているコナンは、呆れを通り越し諦めに近い感情を持った。

「で。なんでこんな所に居るんだよ」

「なんでって、自分の家に帰ってくるのは、そんなに不思議なこと？」

「あのなあ」

「博士居るかしら？」

今の生活拠点はロスだろ、と続けて言おうとしたコナンだったが、有希子の何の脈絡も無いような発言でかき消されてしまった。

阿笠邸を指差している有希子。

「居るんじゃないか。そもそも俺、博士に用があったんだよ」
「そうなの？　実は私も博士のところへ行こうと思っていたの」

有希子はさっさと阿笠邸の前まで行き、インターホンを鳴らした。

阿笠邸では静かで穏やかな時間が流れていた。

博士は新たなメカの開発に勤しみ、哀はソファで寛ぎながら雑誌に目を通していた。

そんな静寂を打ち破るインターホンの音。

「誰じゃろう？」

来訪者の応対のために博士が動いた。哀は博士が動いたのを確認すると、再び雑誌に意識を向けた。

「おやつ？」

博士はインターホンに映し出された人物を見るや否や、巨体を揺らしながらドタドタと小走りで玄関へ向かった。

扉を開けた途端に飛び込んできたのは、どこまでも明るい声と笑顔。

「博士ー、久しぶりー！」

「おおっ、有希子君。久しぶりじゃなあ！」

コナンは、そんな二人のやりとりを無視して上がり込んだ。

「よお、灰原」

哀は顔を上げた。

「あら、工藤君だったの？ 博士、随分と慌ててた気がしたけど」
「あー、やっかましいのが一人居るんだ」

コナンは半目の状態で玄関の方を見た。

「喧しいの？」

哀は疑問に思ったが、その答えはすぐにわかった。

「こんにちは、哀ちゃん！ 元気にしてたあ？」

「工藤君の、お母さん……？」

哀は目を見開いて驚いた顔をした。そんな哀を見てコナンが言う。

「ほら見ろ。灰原だって驚いてるじゃねーか。誰だって母さんが居たら、なんでって思うんだよ」

「何よ、もう」

コナンは少しむくれた有希子を視界に留めつつ、哀の座る向かいのソファアーにドカッと座った。

博士と哀は、いまいちよくわからない会話をする二人を見て呆気にとられていたが、とりあえず博士が口を開く。

「ところで。二人して家に来るなんて、何か用でもあるのかのう？」
「母さんとは、たまたまそこで会っただけだ。俺はこれ」

言いながら腕時計を外し、博士に差し出した。

「メンテナンス頼むよ」

「ああ、了解じゃ」

博士は腕時計を受け取り、有希子を見た。

「で、有希子君は？」

「博士にお願いがあるの！」

呆気にとられた状態から回復した哀は、そのまま長々と立ち話を繰り広げそうな二人を見兼ねて口を挟んだ。

「ねえ博士。とりあえず座っていただいたら？」

博士は哀の言葉でやっと席を勧めることを思い出した。

「そ、そうじゃの。有希子君、座って座って」

「じゃあ遠慮なく」

有希子は未だ不機嫌そうな顔をしているコナンの隣に座った。
有希子の動作を見届けた哀が博士にもう一言。

「座ったら？」

「あっ、ああ、そうじゃな」

博士は哀の隣、有希子の前に慌てて座った。

03 突然の来訪者（後書き）

マズイ。このままのペースだと、この話でクリスマスを迎える頃には、現実には年が明けてんじゃないか？ あっ。評価してください。さうした方々、ありがとうございます。励まされます。なのに、同時に胃痛を引き起こしてしまうチキンな私ですが、頑張ってみますね。

04 マイペースな人

ようやく皆が席に着き、ゆっくり話をできる態勢になった。だがそこで哀が雑誌を置いて立ち上がった。

「灰原？」

哀はコナンの声を無視して有希子を見た。

「あの。工藤君のお母さんは、コーヒーで大丈夫ですか？」

「えっ？ うん、大丈夫」

「わかりました」

「あっ。ブラックのままでもいいからね。それと、そんな堅苦しい呼び方しないで、有希子って呼んでねっ」

有希子はそう言い、ウィンクをしてみせた。

「はい……」

哀はそんな有希子に戸惑いつつ、キッチンへと歩きだした。

「なあ。博士にお願いってなんだよ？」

「話は哀ちゃんが戻ってきてからにしましょ」

程なくして哀がコーヒーを乗せたトレイを持って戻ってきた。

「どうぞ」

湯気の出ているマグをそれぞれの前へ置いていく。

「ありがとう、哀ちゃん」

「サンキュ」

そして博士のマグは、スプーンとミルクのポジションを添えて置く。

「哀君、ありがとう。できれば砂糖も……」

「駄目よ。健康管理を徹底しなきゃならない身だって自覚無いの？」

「いや、しかし、少しぐらいなら……」

「ダーメツ！」

哀にバサツと切り捨てられた博士はしょげてしまった。

二人のやりとりを見ていた有希子はニコニコ、コナンは博士に同情した。

哀はいつものことと気にせず、テーブルの中央に茶請けとしてクッキーを置いた。だが自分用のマグは持ったまま、トレイを自分が座っていた席に置き、先程置いた雑誌を拾い上げた。

「私はこれで失礼します。有希子さん、ついでに工藤君、ごゆっくり」

「待って」

そう言い残し地下室へ行くつもりだった哀を有希子が呼び止めた。

「哀ちゃんも一緒に。ねっ」

特に断る理由もなく、哀は元居た場所へ腰を下ろした。

今度こそ話が聞ける。そう思いコナンは有希子を促す。

「で、母さんの話って？」

しかし、肝心の有希子はコーヒーを一口飲んで、クッキーを一口に入れていいる。その様子を見て、話せるようになるまで待つしかなかった。

クッキーを飲み込んだ有希子は、もう一口コーヒーを飲み、喉を潤した。

「このコーヒーもクッキーも、美味しいわね！」

開口一番に放たれた言葉に、コナンはガクツと肩を落とした。

（どこまでマイペースなんだよ……）

うなだれたコナンの耳に入ってくる有希子の声。

「ねえ博士。このコーヒー、どこの豆使ってるの？」

「クッキーは……えっ、哀ちゃんの手作りっ？」

どうでもいい話をしている。それを聞いていたコナンは、ついに切れた。

「母さんっ！ いい加減本題にいつてくれっ！」

有希子は、立ち上がりながらそう叫ぶ息子を目にしても余裕だ。

「少しくらいお喋りしたっていいじゃないの」

「早くしてくれよっ！　じゃねーと、そのメンテナンスしてもらえねーんだよっ！」

コナンが博士の目の前に置かれた腕時計を指差して叫んだ。

「ちょっと工藤君。喧しいのは貴方じゃない」

「えっ、あ、ああ……」

哀の言葉で冷静さを取り戻したコナン。多少不貞腐れているが、ソファーに座り話を聞くことにした。

三人は有希子に意識を集中させた。

「新ちゃん。クリスマスパーティーやらない？」

「クリスマスパーティー？」

「そう、クリスマスパーティー」

有希子は満面の笑みを浮かべている。一方、コナンは啞然としている。

「ほら、新ちゃんの小学校のお友達……少年探偵団だっけ？　あの子たちと一緒に。もちろん哀ちゃんも一緒よ」

「えっ？　私も、ですか？」

哀は困惑した。

「それでね、博士にお願いがあるの」

「なんじゃね？」

「家でやってもいいんだけど、今から掃除して飾り付けるんじゃ、時間的に厳しいのよねー。だから、ここ使わせてもらえない？」

有希子はキラキラした瞳で博士を見ている。

「なんじゃ、そんなの容易いご用じゃ！」

博士の快諾を得て、みるみる上機嫌になる有希子。

「よかったーっ！　じゃあ二十四日にする？」

「そうじゃのう……」

コナンと哀を置き去りにして話が進んでいく。

「そうじゃ！　子供たちに都合を聞いてみるわい」

「そうね！」

博士は早速連絡をし始めた。

状況が飲み込めてきたコナンと哀。もはや手遅れであるとかわかっていても、小言を言わずにはいられない。

「俺、同意なんてしてねーんだけど」

「私だって。どうしてこうなるのよ？」

「ただ単に、母さんが騒ぎたいだけだと思う」

「つまり、それに巻き込まれたってわけね」

「巻き込まれる方の身にもなってほしいぜ」

そんな二人に、有希子が力強く言い放つ。

「いいじゃない、楽しければっ！」

二人には、もう何も言うことが無かった。

それから、連絡を取り終えた博士も交えて四人で談笑していた。

「しまった！ メンテナンスを忘れておったわい」

皆、有希子のペースに引き摺り込まれ、すっかり忘れていた。
博士が腕時計を持って立ち上がった。

「有希子君、すまんがちょっと席を外させてもらうよ」

「気にしないでー。二人に相手してもらおうから大丈夫よ」

有希子の笑顔に送られ、博士は奥の方へと消えていった。

04 マイペースな人（後書き）

この話、余分なところを切って03と合わせて一つにしたほうが良かった気がしなくもない。でも時間が……（ ㇿ ； ）

05 解毒剤

有希子は博士に言った通りコナンと哀を相手に会話を楽しんでいた。

会話といっても、主に話しているのは有希子で、二人はほとんど相槌を打っているだけだったのだが。

「あつ、電話だ」

コナンがポケットから震える携帯電話を取り出した。そして、少し離れたところまで歩いてから電話に出た。

「もしもし」

それは新一の声。コナンが変声機を使っていた。

残された二人は雑談を続けていた。だが聞く気はなくても電話をしている声が耳に入ってくる。

「クリスマスパーティー？」

今までより大きな新一の声がした。二人はついさっき聞いたばかりのフレーズに、思わずコナンの方を見た。

コナンは視線を感じ、チラッと二人の方を見たが、すぐに背を向け通話を続けた。

「悪いな、蘭。行けそうもねーや」

「ああ、わかったよ。当日行けそうなら行くけど、多分無理だから」

「おう。じゃあな」

通話を終えたコナンは軽く溜め息を吐いた。だが、その表情は意外と明るかった。

コナンは携帯電話をポケットに戻し、ソファ―に座った。

「電話、蘭ちゃんから？」

「ああ。園子がクリスマスパーティーやるから、俺にも来いってさ」

「そう。それで断った、ってわけね」

「ああ。招待されたのは新いだ。このままじゃ行けねーだろ」

「そうよね。コナンちゃんのままじゃ無理よねー」

哀が急に立ち上がった。

「少し、失礼します」

言い終わるとすぐに地下室へ行ってしまった。

「どうしよう……。私、無神経だったわ」

「いや、今のは俺が悪い」

二人とも無意識だったが、幼児化の一因を担う哀を遠回しに責めるような発言をしてしまった。

気まずい空気が流れる。しかし、哀がすぐに戻ってきたことで少々緩和された。

「はい、これ」

哀はコナンの目の前に小さな箱を置いた。ピルケースのようだ。

「なんだよ、これ」

「解毒剤の試作品が入っているわ」

「えっ？」

コナンは蓋を開き中身を確認してみた。中にはカプセルが二つ。有希子は静かに成り行きを見守っている。

「これがあれば、パーティーへ行けるでしょ？」

「でも、試作品は危ないから駄目だって……」

「この試作品は新作なの。あらゆる危険性を出来るだけ排除したわ。だから激しい発作を起こすような副作用は無いの、以前の物とは違ってね。ただし、その所為で服用後六時間ほどで効果が切れてしまうわ」

コナンは薬を見ていた。しかし、蓋を閉じると哀の前に差し出した。

「サンキュ。でもいらねーや」

「どうして？」

哀は驚いた。コナンならすぐにでも飛び付くと思っていたから。

「あっちのパーティーには行かない。どっちのパーティーも二十四日。こっちの方が決まったの先だろ？ だったら先に決まった方を優先するのは当然だ」

「でも、こっちのパーティーが終わってから、彼女に顔を見せてあ

げるくらいなら容易に出来るわ」

「まあそうだけど……。別に会わなくても、電話でいくらでも話せるし。それに……」

コナンは言いかけてやめた。

（蘭と、元の姿で会ったからって何になる？）

そう言おうとした自身に引っ掛かりを覚えたからだ。

蘭が新一を思い、会いたがっていることは知っているし、自分も会いたがっていたはずだ。なのに、何故こんなことを言おうとしたのか。

よくわからないが、会話の途中で考え込むわけにもいかず。

「とにかく、いらないから返すよ」

「当日になって気が変わるかもしれないでしょ？ いいから、とりあえず持っておきなさい。貴方に試作品を渡すなんて、今後一切無いかもしれないわよ？」

「……わかった。とりあえず貰っておくよ」

話に切りがついた途端、有希子はピルケースを手に取り、蓋を開いて中を見る。

「へえー。これでコナンちゃんから新ちゃんへ戻れるのね」

有希子は哀を見た。

「これって哀ちゃんが飲んだら、哀ちゃんも元の姿に戻れるのよね？」

「はい、そうですけど？」

「ねえ、これ今飲んでみてくれない？」

「えっ？」

「私、元の姿に戻った哀ちゃん見てみたいわ！ ダメ？」

コナンは無言のまま、思い付きだけで話しているような有希子を見て呆れていた。同時に、哀の元の姿をちゃんと見てみたいと思っていた。

「駄目、ですよ」

「どうして？」

「私の元の姿を知っているということは、それだけで命を狙われる理由になりえますから」

有希子は少し考える仕草をしてから、再び哀を見た。

「じゃあ、そんなことを気にせずに会える日を楽しみにしてるわねっ！」

笑顔で言い切った。

哀は、予想外の言葉に驚き、何も言えなかった。

腕時計のメンテナンスを終えた博士が戻ってきた。

「ほれ新一。終わったぞ」

「サンキュ。じゃ帰るよ」

コナンは立ち上がりながら腕時計を受け取った。

「新ちゃんが帰るなら私も帰るわね。じゃあ博士、明日飾り付けしに来るわね」

二人が去り、阿笠邸には再び静かで穏やかな時間が流れ始めた。

05 解毒剤（後書き）

実は、このあたりから当初の妄想が役に立たなくなりはじめました。自分が書いたもののなに、後から読んでみると意味不明なところがチラホラ。そしてそれが先に行けば行くほど悪化↓修正では無理↓書き直し。今のところ07まではほぼ完成。ただ、晒す前にある程度先を作ってからでないとは後から矛盾が大量発生しそうで……。

06 一つの可能性

阿笠邸を後にした二人は工藤邸のリビングに居た。

「じゃあ新ちゃん、早速やっちゃいませよ！」

「はあ？ 何を？」

いきなり主語の無い言葉を繰り出されたら、コナンがわからないのも当然だ。

「決まってるじゃない。飾り付ける物を引っ張り出すのよ。だから一緒に来たんじゃないの？」

「違うよ。俺はこれを置きに来たんだ。あっちに持って帰るわけにはいかなーだろ？」

コナンは言いながらピルケースを取り出し、テーブルへ放った。それはテーブルの上を滑って、小さな箱に軽く当たって止まった。それを目で追っていた有希子は、その小さな箱に興味を示した。

「こんな物あった？」

それを拾い上げるより先に、コナンが奪い取っていた。

「どうしたの？ 慌てちゃって」

「べっ別に慌ててなんか無いっ！」

明らかに慌てているコナンを見て、有希子はある考えに至り、にやけた。

「さっきはあんな素っ気ない態度だったのに、ちゃんとう意してたんじゃない、蘭ちゃんへの、プ・レ・ゼ・ン・ト!」

「へ? 蘭へのプレゼント?」

キョトンとしたコナンの顔を見て、自分の考えが間違っていたのかと思ったが、それは綺麗にラッピングされていて、どう見てもプレゼント用に見える。

「あつ。私にくれるの?」

「んなわけねーだろっ!」

「じゃあ何?」

「なんでもねーよっ!」

コナンはピルケースを拾い上げ、プレゼントと思しき箱と一緒に持って新一の部屋へ行ってしまった。

有希子は考えていた。

(あのサイズだと、指輪かしら? だとしたらあの姿でお店に行って買ってきたとは考えにくいわね……)

おもむろに移動し、ごみ箱の中を覗く。そこには配達伝票。

(やっぱり通販ね。あ、詳細がある。……ピラス?)

有希子の眉間に皺が寄った。

あれの中身が何かは突き止めたので、伝票はごみ箱へ戻した。

（蘭ちゃんじゃないとしたら、誰？）

そこにコナンが戻ってきた。

「なーに考えてんだよ。余計な詮索すんじゃないぞ」

「もうしちゃったわよ。あれはピアスでしょ？」

「……そう、だよ」

コナンの顔には、なぜ中身を知られているのだろうか、と書いている。

「ごみ箱の中、見ちゃったの」

「ああ、そうか……」

隠す程のものでもないのに、コナンは話すことにした。

「母さんの言う通り、あれはプレゼント用のピアスだよ。この前、俺が買った」

「誰にあげるの？」

「……………灰原」

目を逸らし、小さな声で呟くように答えたコナンの顔が、有希子には少し赤みを帯びたように見えた。

「へえー。哀ちゃんにねー」

「な、んだよ」

「別にいい？」

「母さんが何考えてんのかは知らねーけど、特別な意味があるわけじゃねーかなっ！」

「そーお？ わざわざピアスあげるなんて」

「灰原にはさ、ほら、世話になってるから。さっきだって解毒剤くれたしさ、他にもいろいろと。お礼だよ、お礼」

コナンは自分で言っていて違和感を持ったが、そう感じた理由がわからない。

「お礼ね。いいんじゃない？ 感謝の気持ちを伝えるのって、とっても大切なことよ」

「ああ」

有希子にはコナンと話していて先程から感じていることがあった。まだ確信は得られていないのだが。

「そういえば、蘭ちゃんには何を用意したの？」

「んあ？ 特に用意してないけど？」

「もう、抜けてるんだからー。蘭ちゃんにもいっぱいお世話になってるでしょ？」

「そうだよな……。ピース選びに夢中で、すっかり忘れてた」

（やっぱり、そうなのね）

有希子はあることを確信した。だがもう一つ気になることが。

「まったく、もう。クリスマスカードぐらいは用意しなさいよ」

「わーったよ」

「なーんで好きな子へのプレゼント、用意するの忘れちゃうかなー」
「おい。蘭はそんなじゃねーよ」

コナンは有希子を半目で見ながら言った。

「じゃあ、新ちゃんにとって蘭ちゃんは何？」

「何って、幼馴染みに決まってんだろ」

即答するコナンを見て有希子は目を細めた。

「じゃあ、哀ちゃんは？」

コナンは一瞬目を見開いたが、すぐ元に戻った。

「なんでいきなり灰原？」

「いいから。哀ちゃんは？」

そう言われ、コナンは当てはまりそうなものを考えてみる。

友達……違う。仲間と言えば仲間だが、しっくりこない。相棒……

……何かが足りない。どうも違和感があるのだ。

そして、一つの考えが浮かぶ。

（そんなはずねーよ。だって俺は、蘭が好き……だろ？）

あり得ない。と簡単に、その可能性を否定する結論を出してしまった。そして、他にも当てはまりそうなものを探してみるが、見つからない。

沈黙の後、コナンが発した言葉は。

「わかんねーや」

「はっ？」

「よく、わかんねーんだ」

有希子は呆れた。

(この子、やっぱり自覚無いの?)

わざわざ教えてあげることではないだろうと、この話は終わりにすることにした。

「ところで新ちゃん。そろそろ飾りの準備しない?」

「げっ!」

「とりあえずオーナメントでも……って新ちゃん?」

有希子が少し目を離れた隙にコナンの姿が消えていた。玄関の方から声がする。

「早く帰らねーと蘭が心配すっから!　じゃあな!」

「ちよっと新ちゃんっ!」

コナンは言いながら靴を履き、言い終わったのと同時に外に飛び出し全速力で走った。

工藤邸から充分離れた所まで来て、コナンは走るのを止めた。

「ったく。どうしてあんなこと言うんだよ。なんでいきなり灰原……」

本当によくわからない。一番わからないのは違和感の理由なのだが。

そこで、理由となり得るものとして、先程浮かんだ一つの可能性が頭を過る。

「あり得ねーって。俺は、蘭が好き」

そう呟くと、違和感がジワジワと全身を包み込んでいく。

「あり得る……のか？」

そして一つ溜め息を吐くと、もやもやした心を引き摺りながら歩
きだした。

06 一つの可能性（後書き）

続きます。

07 パーティーの後

十二月二十四日。

昼前から始まったクリスマスパーティーは、皆でゲームをしたり、飲んだり、食べたり、談笑したり。普段の遊びとたいして変わらなかった。

大人たちは、それに参加しながら写真を撮ったり、酒を飲んだりしていた。

それでも、普段と違うこともあって。

「うわぁー、すごぉーいっ！」

これは室内に入ってきた時に歩美が上げた感嘆の声。光彦も元太も同じような反応だった。

「やりすぎだろ」

コナンは引き気味だった。

壁には電飾が張り巡らされ、窓には白で描かれた冬景色の街並と、その上空にはサンタクロースとトナカイ。

ツリーは高さ約3メートル。そしてそれを彩るオーナメントの数々は、クリスマスムードを盛り上げるには充分すぎるほどの量と可愛らしさ。

この室内を一言で言うなら、メルヘン。

「二人とも張り切り過ぎなのよ……」

哀も引き気味だった。

ただ、二人は室内の装飾だけで引いているのではない。

「さあ皆、集まって！ サンタさんがプレゼントあげるわよー」

ニコニコしながら自らをサンタさんと呼んだ有希子と、博士の格好が凄いのだ。

博士はトナカイの着ぐるみ姿。有希子はサンタクロースの衣裳を身に纏っている。しかもそれがミスカで生足……。

二人が、特に既に高校生になっている息子が、そんな姿を見たら引いて当然である。

「有希子さんって、スゴイ人ね」

「俺、何年か前にもあのサンタクロース見たことがある……」

すっかり脱力してしまったコナン。

「……今日だけは、貴方に同情するわ」

「おう、ありがとよ」

「さあ、早く行かないとサンタとトナカイが怒るわよ」

二人はこんな感じだったが、子供たちもサンタもトナカイも楽しそうで。

「ま、あいつらが楽しんでんらいーけどよ」

「こういうのも、たまになら悪くないわ」

結局は二人も楽しく過ごすことになった。

だが、楽しい時間というものは、あっという間に過ぎてしまうものだ。子供たちの帰りのことを考え、日が暮れる前にお開きとなった。

子供たちが帰った後の阿笠邸は大変なことになっていた。

「散らかり放題だな」

「派手にやってくれたわね。片付けないと……」

部屋の惨状に、二人は溜め息を吐いた。

飾り付けは別として、床やテーブルの上に物が散乱している状態では落ち着かないのだ。

だが、二人の気をより重くしているのは。

「トーナカーイさーん！ さあさあもう一杯！」

「おお、サンタさんもう一杯！」

大人二人は、今までコナンのことを“新一”と呼ばなかったのが奇跡だ、と思える程酔っていた。

「おい灰原。コレはどうする？」

「どうするって言われてもね……」

酔っ払いというものは、周囲にいる者を巻き込みたがる。

「二人とも一緒に飲もうよー」

「うまいぞー」

酔ったミニスカサンタと腹の出たトナカイが笑顔で手招きをしている。なかなかお目にかかれるものじゃない。

「バーロ。誰が飲むか」

「せっかくだけど、遠慮しておくわ」

「俺たちは片付けするから、二人で飲んでくれ」

サンタたちは何やら文句を言っていたが、再び陽気に飲みはじめた。

コナンと哀は、途中何度も酔っ払いに絡まれながらも片付けを続けた。

だいぶ散らかってはいたが、二時間もすれば部屋はすっかり片付いていた。あとは食器洗いを残すのみ。

「灰原、少し休憩しよう。コーヒーでも飲もうぜ」

「そうね」

ソファアに並んで座り、のんびりとコーヒーを楽しむ。パーティーの最中、甘いジュースばかりを飲まされていた二人は、とても安らいだ。

「やっぱコーヒーはいいなー」

「ええ、落ち着くわ」

「でもさ、なんかスゲエことになってたけど、パーティーは楽しかったよな？」

コナンは笑顔で哀を見た。

「そうね」

哀は目を閉じ、口元に笑みを浮かべた。

しかしすぐに目を開き、真剣な顔でコナンを直視した。

「工藤君。あとは私が片付けるから、貴方は彼女のところへ行っ
てあげなさい」

「えっ？」

「行きなさい」

あまりに真剣な眼差しにコナンは圧倒されたが、哀に負けないほ
ど強い思いを込めた瞳で見つめ返した。

「行かねーよ」

今度は哀が圧倒された。

「……どうして？」

コナンは困った。

自分で行かないということは確定しているのだが、なぜ確定
に至ったのか、理由が自分でもよくわからないからだ。

そこで、その理由となり得るものとして、先日浮かんだ一つの可
能性が頭を過る。

「どうして、って……」

視線を逸らし言い淀むコナンを見て、哀が思い付いたのは。

「彼女と、喧嘩でもしたの？」

コナンはその可能性を探ってみることにした。そのためには、こ
こに留まらなければならない。

「いや、そんなんじゃないけど。とにかく行かないから」

会話を続けながら、留まる口実を探し、見付けたのは。

「それに、あの二人をお前だけに押しつけるのは心苦しい」

そう言って、いつの間にか床に座り込み、酒を飲み続けている有希子たちを指差した。

「さっきは二対二だったから逃げられたけど、二対一になったらお前、絶対無理矢理にでも飲まされるぞ」

「大丈夫よ」

コナンの口実は、哀には通用しないようだ。

「確かに二対一じゃ逃げられないかもしれないけど、下戸ってわけでも無いし」

すると哀は立ち上がり、コナンの腕を掴んで引っ張った。

「お、おいっ?」

何も言わずに玄関まで引っ張り、扉を開けコナンの靴を掴むとそれを外へ放り出した。

「なんだよっ?」

そして今度はコナンを突き飛ばして外に追い出すと、素早く扉を閉めた。

「おい灰原っ！」

コナンは何が何だかさっぱりわからない。すると扉の向こうから哀の声が聞こえる。

「早く解毒剤を飲んで、彼女のところへ行くのよ。いいわね？」
「ちょっと待て！」

コナンの呼び掛けも虚しく、哀の気配はすでに室内に消えてしまっていた。

「……さみー」

日が暮れた冬の屋外は半端なく寒い。仕方なく靴を履き、とりあえず工藤邸へ行くことにした。

コナンは工藤邸の自室に来た。

「つたく、灰原のヤツ」

時刻は午後六時を少し過ぎたところ。

今、毛利邸へ帰っても誰もいないはず。蘭はパーティーへ行っているし、小五郎はどこかへ出掛けると言っていた。

「どうすっかな……」

あまり気は進まないが、まずは解毒剤を飲んで、それから蘭に連

絡することにした。

服を脱ごうとした時、ポケットからピアスの箱が落ちた。それを拾い上げたコナンの胸がキュッと締め付けられた。

「まだ渡せてねーのに、追い出しやがって……」

思わず空いている方の手を胸に当てる。

だがすぐに解毒剤を服用すべく、着ているものを全て脱いだ。

「さて、飲むか」

ピルケースからカプセルを一つ取り出し、口の中へ放り込み、水で一気に流し込んだ。

飲み込んだすぐは何も起こらなかったが、一分もすると脈が早くなり、苦痛が襲い掛かってきた。何度経験しても決して慣れるものではない。

「うぐああ……っ！」

血液が沸騰しているような熱さ。体を内から殴られているような痛み。特に、直接心臓を殴り付け潰されるような感覚は意識を遠退かせる。

しかしそれは一時的なもの。

「ハア、ハア、ハア……」

自分の手を見つめる。握ったり開いたり、自分の思い通りに動く大きな手。

「戻った、か」

そう呟いた声も、いつもの高い子供の声ではなかった。

07 パーティーの後（後書き）

最初はパーティーの様子を細かく書いていたのですが、無くても影響が無いことに気づき、切り落としました。

08 不思議な時間

コナンを追い出して室内へ戻った哀は、コナンの予想通り酔っ払いに絡まれることになった。

「あれ？ 新ちゃんは？」

「帰りましたよ。彼女のところへ行くって」

「そうなのお？ ねえ哀ちゃん、やっぱ一緒に飲もうよ。博士ったら、もう何言ってるかわかんなくなっちゃって、つまんないの。それに、新ちゃんも帰っちゃったし、暇でしょー？」

確かに、暇と言われれば暇だ。洗い物はあるけれど、どうせ洗うなら有希子たちの使っているグラスもまとめて一度で済ませたい。

「そうですね。飲みましょうか」

承諾を受けて、有希子は上機嫌で空いているグラスを掴み、その中にシャンパンを溢れんばかりに注ぎ、哀の前に差し出した。しかし哀は胸の前で両手のひらを見せて制止のポーズをした。

「少し待っていてもらえませんか？」

有希子の了承を得て、哀は地下室へ降りていった。

哀が地下室へ降りてから五分ほど経った。

「博士ー。哀ちゃんなかなか戻ってこないわねー」

「んにゃ？ あいきゅむあにゃんが？」

「もう、何言ってるかわかんないってばー」

博士は既に酩酊状態。会話は不能だ。

そこでようやく階段を昇ってくる音がした。有希子がそちらを見ると、そこに立っていたのは。

「お待たせしました」

それは哀ではなく、二十歳位の女性。

有希子は見覚えのある顔立ちだが初めて会う彼女を見て驚きながらも、状況と印象的な髪の色から即座に答えを導き出した。

「哀ちゃん、よね」

その女性是有希子の前までやってくると、はにかんだような笑顔を見せた。

「そうです。子供のままだと、あまり長くお酒にお付き合い出来ませんから」

驚いた顔をしていた有希子は笑顔になり、グラスを差し出した。

「じゃあ、とことん付き合ってもらうから、覚悟しといてねっ！」

「その前に、あちらへ行きませんか？」

彼女はソファを指差した。

「そうねー。哀ちゃん、じゃなくて……名前は？」

「えっ？」

「貴女の名前は？」

本名はまずい。そう思ったが、これだけ飲んでいれば明日には、名前も、この姿も忘れていいるだろうと判断した。

「私は志保です」

しかし、忘れなかった場合に備えて、名字だけは伏せておくことにした。

「志保ちゃんね！」

二人は床に置かれた酒類を持ち、ソファーへ移動しようとした。

「あっ！ 博士どうしよう？」

博士は寝てしまっていた。

「まったく……。仕方ないわね、こんなところで。毛布でも掛けておいてあげましょう」

志保は持っていたグラスなどをテーブルに置くと、毛布を取りに行った。

その時、インターホンが鳴った。有希子は多少覚束ない足取りで玄関へ向かった。

「はい、どなたー？」

酔っ払いに警戒心なんてものはない。勢い良く扉を開けると、そこには新一が立っていた。

「新ちゃん。どうしたのー？」

「さみーから中に入れてくれ」

志保が博士に毛布を掛けていると、有希子が戻ってきた気配がした。そちらを見ずに口を開く。

「済みませんね、出てもらっちゃって」

しかし、気配が一人分でないことに気付き、急いで顔を上げた。

「えっ？」

そこに新一の姿を見付けた志保は驚いた。
だが新一のほうが数倍驚いた顔をしていた。

「灰、ば、ら？」

一足先に驚きから抜け出した志保は、とりあえず。

「ちようどよかったわ。博士、ベッドまで運んでくれない？」

「あ、ああ」

新一はまだ驚いてはいたが、素直に博士を運ぶことにした。

「うわ、重て。一人じゃ無理だ。お前も手伝え」

もともとヘビー級な上にトナカイの着ぐるみ。さらに酔い潰れて

完全に力の抜けている博士は重過ぎた。

「仕方ないわね」

「そっち持ってくれ。せーのっ！」

なんとか二人で抱えて運び、ベッドに投げ込んだ。

「まったく手が掛かるな」

「本当に」

呆れながら博士を見下ろしていた二人だったが、志保が新一を見た。

「ところで、どうして貴方がここに居るのよ？」

「あ？　んなことより、なんでお前まで元に戻ってんだよ？」

「解毒剤を飲んだからに決まっているでしょ」

「そーじゃなくて！」

「お酒に付き合うのに、子供のままじゃ厳しいもの」

「なるほどな。って飲む気かよ？」

ソファーに座った有希子が二人を呼んでいる。

「あー、うるせーのが呼んでるから行こうぜ」

二人が有希子の元へ行くと、グラスが一つ増えていた。

「新ちゃんも飲むでしょ？」

立ったままの新一に当然よね、とグラスを差し出してくる。

「親が未成年の息子に酒を勧めてどーすんだよ」

「堅いこと言わないのーっ！ ほら志保ちゃんも飲もうねー」

「待て。コイツも未成年じゃなかったか？」

「志保ちゃんって幾つ？」

二人の視線が志保に集中した。

「十八です」

志保はすでに有希子の向かいに座り、グラスを手になっていた。

「おい灰原っ！ 何普通に飲もうとしてんだよっ！」

志保は新一を無視して一口飲んでしまった。

「ちょっと新ちゃん！」

「なんだよっ？」

「彼女は哀ちゃんじゃなくて志保ちゃん」

「は？」

「名前間違えちゃダメじゃない。ちゃんと志保ちゃんって呼ぶのよ」
「はああ？」

当の志保は、あら美味しい、なんて言いながらシャンパンを飲んでいる。

「ほら、新ちゃんも飲んで飲んで」

新一はとりあえず志保の右隣に座った。

「なあ灰ば……じゃなくて、み」

「工藤君！」

宮野、と言おうとしたが志保に遮られた。

志保は新一の耳元に唇を寄せ、それを手で覆って囁いた。

「宮野は駄目よ。私は有希子さんに名字は教えてないの。フルネームがわかれば、素性を探るのなんて簡単でしょ？　これ以上巻き込みたくないなら、言わないで」

志保の言うことはもつともだ。今度は新一が志保の耳元で囁く。

「確かに母さんなら好奇心だけで調べちまうかもしれない。わかった、宮野はやめとく」

そんな二人のやりとりを見ていた有希子が冷やかす。

「なによー。内緒話？　あっ、私のこと邪魔者だと言ってたんでしょー？　そんなに二人きりになりたいのー？」

「ち、違います！　それより工藤君。彼女のところへ行かなくていいの？」

志保は話題を変えた。

「端っから行かねーって言ってたろ。それに、こんな珍しいヤツが居るんだ。ここに居たほうが面白い」

そう言って志保を見た。

（それに、あれを探ってみなきゃなんねーし……）

新一は、一度追い出されて探るのを断念したが、あの可能性が気になっていた。

探るといっても、何か特別な行動を起こすのではなく、新一が自身の感情の起伏を敏感に読み取るようにするだけなのだが。

「新ちゃん。ここに居たいなら飲んでもらうわよー」

「しゃーねーな。飲みゃいーんだろ」

新一はグラスを取った。

「じゃあ、かんぱーい！」

有希子の声と共に、グラスを合わせる音が響いた。

こうして、普段ならあり得ない顔合わせで過ごす、夢のような、不思議な時間が始まった。

08 不思議な時間（後書き）

一応書いておきますが、日本では、お酒は二十歳になってから。未成年者の飲酒を止めないのもダメだし、未成年者に飲ませるのもダメですからね！。

09 シェリー

時刻は午後九時。三人で飲み始めて既に二時間が経過していた。

「二人とも、どんどん飲んでえ」

有希子はずっと酒を勧め続けていた。

「いただきます」

「おい志保。無理して付き合うことねーぞ？」

「大丈夫よ、これくらい」

「お前、酒つえーな」

「そう？」

新一は気分は良いが、慣れない酒で体が熱くなり、動きが少し鈍くなってきたと感じていた。

志保は少々顔が赤くなっているだけで、見た目は普段とあまり変わっていない。だが本人は、心が少し開放的になってきていると自覚していた。

そして有希子は。

「あー。なんか眠くなってきたやつた。もっとお喋りしたいのにい」

昼間からずっと飲んでいるのだから、とっくに潰れていてもおかしくなかった。だんだんと口数が減り、ついにソファで丸まって寝てしまった。

「やっと黙ったか」

飲み始めてから今まで、有希子によって新一の過去の失態が散々暴露され続けていた。だからこの言葉は、新一の心の底から吐き出されたものだった。

「運ぶ？」

「そうした方がいいだろーけど、俺、そんなに力入らねーかも」

「じゃあ毛布取ってくるわね」

「わりーな」

志保は有希子に毛布を掛けると、元の場所に座った。

「まだ飲むか？」

「もう飲めない？」

「いや、まだ平気」

「そう。せっかくだし、もう少し飲まない？」

「よし、飲もう。でももう酒ほとんど無いぜ」

残っているのはデカンターに移されたポートワインのみ。

「これが無くなったら終わりにしましょ」

「あっ、そうだ。ちよっと待ってろ」

新一は外へ出て行ってしまった。

志保が静かにワインを飲みながら待っていると、すぐに新一が大きな袋を抱えて戻ってきた。

「隣から掻っ払ってきた」

新一はイタズラに成功した子供のように笑った。

「これだけありゃ好きなだけ飲めるぜ」

元の場所に座った新一が、袋の中身を取り出してテーブルの上に並べていく。ワイン、ウイスキー、焼酎、日本酒……。酒という酒が次々と出てきた。

「何よ、飲む気満々じゃない」

「うるせーのが寝て、やっと楽しく飲めるようになったんだから飲むもうぜ。それに、こんなのも見つけたんだ」

そう言って取り出した一本のボトル。それは。

「シェリー……」

「飲みたくねーか？」

暫し呆気にと取られていた志保だが、やがて挑発的な笑みを浮かべた。

「今、私がこれを飲みたいって言ったら、貴方は困るのかしら？」

「なんで俺が困るんだ？」

「あら、名探偵さんもお酒には詳しくないのね」

志保の馬鹿にしたような言い方で、新一は少しムツとした。

「悪かったな。で、なんでだよ？」

「知りたい？」

「そんな言われ方したら、誰だって知りたいだろ」

「じゃあ教えてあげる」

志保は新一をまっすぐ見つめた。

「いい？　女が男と一緒にの時に、シェリーを飲みたいって言うことはね」

一旦言葉を切り、志保は新一に体を寄せた。さらに左手を新一の右頬に添えて少し顔を近付けた。

「えっ……」

新一は志保の突然の行動に驚いて、動けなくなった。

「今夜、貴方と寝てもいいわよ」

そう言って妖艶な笑みを浮かべる志保を間近で見、息をするのも忘れた新一の心臓はドクドクと脈打って全身が熱くなる。

数秒見つめ合った後、志保はすっと手を離し、元の位置に座り直した。

「って意味になるの。わかった？」

普段の志保なら、たとえ冗談でもここまではしないだろう。今は酒の力によるものかもしれない。

「……………」

新一は声も出せずに固まっていた。志保が言った衝撃的な言葉が、頭の中を駆け巡っていた。

志保はその様子を横目に見ながら、グラスに残っていたワインを一気に流し込んだ。

「何よ、意味わからなかったの？　つまり、セッ」
「言うなっ！」

新一はストレートな言葉で言い直そうとした志保を慌てて止めた。
その顔はこの上なく赤く、耳まで真っ赤だ。

「意味はわかったから、そんな直球に言うなっ！」
「何も言わないから、てっきりわかっていないのかと思ったわ」

志保はいつも通り落ち着き払った様子。

「いくらなんでも、それくらい俺にだってわかるっつーの！」

新一は顔が赤いだけではなく、汗もかいていた。

「ふふふっ！　工藤君、動揺しすぎよっ！」

志保は普段なら見られない様子の新一を見て、声を出して笑った。

「おっ、おめーが俺をからかうからだろっ！」

「でも、でもっ、はははははははっ！」

「笑いすぎだっ！」

新一は不貞腐れながらワインをがぶ飲みした。それでも、楽しそうに大笑いする志保を見て、胸の辺りがじんわりと暖かくなるのを感じていた。

志保の笑いがやっと笑いが治まった。

「あ。ワイン、無くなっちゃったわね」

「ん？ ああ。で、次は何飲む？」

「そうねー。わざわざ持ってきてくれたし、シェリー飲もうかしら？」

「えっ？」

新一は再び赤らんだ。

「何？ 赤くなって。他意は無いわよ」

「わ、わかってんよ」

「せっかくだし、ね」

「おう。ならグラス変えようぜ」

新一は空いたグラスを下げ、新たなグラスを持ってきた。
コルクを抜き、シェリーをグラスに注ぐ。

（やり返してやる……）

新一は、注ぎながらそんなことを考えていた。
二つのグラスを手にとると、一つを志保に手渡した。

「ほらよ、乾杯」

「乾杯」

静寂の中、グラスの合わさる音が響き渡った。

「美味しいな」

そう言った後、新一はすっと立ち上がった。

「どうしたの？」

「さて、行こうか？」

「……どこへ？」

新一は志保の前に左手を差し出した。

「こっちの“シェリー”も味わっていいんだろ？」

「えっ？」

つまり、そういうことだ。

志保の頭の中を邪な考えが過る。しかし、そんな考えも新一の誘いも、拒まなければならなかった。

そう思うと、声が大きくなる。

「ちよっとっ！ 他意は無いって言ったでしょっ！」

大きな声で拒否する志保が慌てているように見えて、新一が腹を抱えて笑った。

「あははははっ！」

「……からかったわね？」

気付いてももう遅い。冷静に考えればわかりそうなもののに。

志保は一瞬でも悩んだ自分を恥じ、悔しくなった。

「笑いすぎよっ！」

「だってよお、やられっぱなしじゃおもしろくねーだろっ！ はははっ！」

「貴方って人は……」

志保は軽く溜め息を吐いた。だが、本気で笑う新一を見て微笑んだ。

09 シェリー（後書き）

シェリーにはこんな意味があったはず。間違ってたらゴメンナサイ。
どうか今日中にラストまで行きたいのですが、時間的に厳しそうですね。仕事をサボれば時間なんていくらでも……。ああっ、サボりたいっ！（↑ダメじゃん）

10 認めたくない(前書き)

まずは、ごめんなさいっ！ 多忙に負けました……。一度最後まで書いたものに納得がいかず、でも書き直す時間が無くて、クリスマスネタなのに話が終わる前にクリスマスが終わってしまいました。時機外れでも構わないという方は続けて読んでいただけると幸いです。

10 認めたくない

二人は、たまに雑談をしながら、ゆっくりと酒を飲み続けている。沈黙している時間は長いが、それを苦痛に感じることは無かった。

元々口数が多くない志保にとって、沈黙も心地の良いものだった。しかし新一にとっては、沈黙は自分の心と向き合う貴重な時間となっていた。

ワインに飽きた二人は他の物を飲むことにした。
新一が冷蔵庫を開け、中を覗き込む。

「ビールでいいか？」

「ええ」

新一の言葉を受けて、志保がグラスを用意する。それを横目に捉えた新一が、栓抜きと瓶ビールを一本掴んで戻ろうとした時。

「待って。これも持っていてくれない？」

志保が冷蔵庫から先程のパーティーで残ったジンジャーエールを取り出し、新一に見せた。

「あ？ いいけど、ビール飲まねーのか？」

「飲むわよ」

新一は一瞬意味が分からなかったが、ジンジャーエールを受け取りながら思い付いたことを口にする。

「あつ、混ぜるのか？」

志保は薄笑いを浮かべながら手に持ったマドラーを揺らした。

「そのまま飲むだけじゃ、つまらないでしょ？」

「やっぱり。確かそんなカクテルあったよな」

新一の考えは当たっていた。

二人でソファーに戻ると、志保がビールを自分のグラスの中程まで注いだ。

「貴方はそのまま飲む？」

「いや、混ぜるよ」

志保は新一のグラスにビールを同じように注ぐと、次にジンジャーエールを溢れる直前まで注ぎ、マドラーで軽く混ぜた。

「はい、どうぞ」

新一は差し出されたグラスを受け取り、それを眺めた。

「綺麗な色だな。ところで、このカクテルの名前思い出せないんだけど、何？」

志保も新一と同じように手に持ったグラスを眺めた。

「シャンディー・ガフ」

グラスを見ていた新一は、呟くように答えた志保を見る。

「お前、さっきのシェリーの話もだけど、本当に酒に詳しいな。酒、好きなのか？」

新一は感心してそう言ったのだが。

「特に好きってわけじゃないけど、お酒とは何かと縁がある生活してたしね……」

志保はグラスを見たまま苦笑した。

新一はその横顔を見て、失敗したと思った。

コードネームに酒の名前を使うような組織に居たのだ。酒について覚えるつもりが無くても、否応無しに身につけてしまったのだと想像出来た。

「そっか……」

新一が呟いたのを最後に会話が途絶えた。

沈黙の中、新一は考えていた。

（俺は、コイツのことをどう思ってるんだ？）

チラリと志保を見ると、無表情のままグラスを口に運んでいた。どこか遠くを見ているような瞳には色が無い。

きっと今、志保は組織に居た頃の事を思い出している。そう思った。

（コイツのこと、俺、何も知らねーんだよな……）

新一は酒を一口飲むと、グラスを見つめたまま考え続ける。

（知りたい……。コイツのことなら、どんなことでもいい。知りた
いんだ）

そう、どんなことでもいい。食べ物好みでも、服好みでも、好きな本でも音楽でも構わない。とにかく何が好きなのが知りたい。それを知って、彼女が喜ぶことがしたい。喜ばせて、笑わせた
い。

（今みたいな顔、させたくねーんだよ）

ピアスをプレゼントしようと思ったのもそうだ。願掛けのピアスの話をする顔がとても切なそうで、寂しそうで……。自分がなんとか笑顔にしてやりたいと思ったからだ。

（なかなか切っ掛けが無くて、まだ渡せてねーけど……）

ポケットの上から、ピアスの箱を触った。

（喜んでほしいんだよ、お前には）

新一が再び志保をチラリと見ると、目が合った。

「何よ？」

「いや、別に……」

新一は曖昧に笑ってみせた。

「そう」

志保は新一を追及せず、静かに飲み続けた。

今はとにかく考えたかった新一には、それが有り難かった。そして思考を再開する。

（お前を笑わせたいんだよ。俺が笑わせてやりてーんだ）

思えば、最近の自分は彼女の一举一動に一喜一憂しているような気がする。

彼女が陰の表情や行動をするのを見るたびに胸を痛め、たまにしか拝めない陽の表情や仕草に喜びを感じ、幸せな気分になる。

（どうしてだ？）

その疑問の答えとして浮かぶのは、やはり先日思い付いた自分の思い。

（俺は、コイツのことが……）

だが、その思いを否定したい自分が居る。それを認めてしまうのが怖いのだ。それを認めるということは。

（だって、俺は蘭を待たせてるんだぞ？）

付き合っているわけではない。でも新一は、蘭が自分を好きなこ

とを知っているし、自分も蘭が好きだった。

（だった？）

ふと、蘭に向ける思いが過去形になっていることに気付いた。それでも、認めたくない。

（俺が認めてしまったら、きっと、蘭を泣かせる……）

新一は泣かせたくないのだ。

（蘭の涙は見たくない。大切な……幼馴染みの涙は）

新一にとって蘭は大切な幼馴染み。だから傷付けたくない。

（だから蘭にも笑っていてほしい。笑わせるのが、俺じゃない誰かでも）

もう、蘭が好きだった頃には戻れそうもない。だけど。

（心変わりなんて、認めねーぞ、俺は）

それが“逃げ”だと分かっているけど、新一には自分の思いを受け入れることが出来なかった。

（クソッ）

そんな自分に苛立った新一は、全てを忘れたくて、グラスに残っていた酒を一気に飲み込んだ。

「……」

空になったグラスを無言で見つめる。喉越しが良く、ビールの苦味が緩和されているはずのそれが、今の新一には、とてつもなく苦く感じられた。

そして、そんな自分を見つめる志保の切ない瞳に、新一は気付かなかった。

10 認めたくない（後書き）

遅れたついで（？）に今書き直しをしています。なので、完結はきつと来年です……。 済みません、また酒ネタ書きちゃいました。 シャンデイー・ガフの作り方は、本文とは逆と言われたり、同時に注げと言われたりします。って私、どんだけ酒好きなんでしょうね。 懲りずにロック・ア・コーで別の妄想をしている私が居ます……。 （このカクテルのレシピ知ってる方、居ますかね？）

11 プレゼント

ずっと黙ったまま考え込む新一を見て、志保は密かに心配していた。

（やっぱり、彼女に会いに行きたいのかしら？）

新一と蘭が相思相愛だと思っている志保が、こう考えるのは当然だろう。

それでも志保はそれを言わないでいた。新一がどうであれ、せっかく二人で過ごせるこの時間を手放したくないと思うようになっていたからだ。

何か話をする切っ掛けが無いものかと考えていた志保は。

「そういえば、どうしてここへ来たの？」

新一がここに留まる訳は聞いたが、来た訳を聞いていなかったことを思い出した。

「あっ、そうだ。これを渡そうと思って」

新一にとって、これは良い切っ掛けだった。沈み込む感情を振り切り、明るい声で答え、ポケットから何かを取り出して志保の前に置いた。

「何？」

綺麗にラッピングされた小さな箱。

「お前にやるよ。気に入るかどうかはわかんねーけど、開けてみ？」

志保はいきなりのプレゼントに驚いたが、言われた通り開けてみることにした。ラッピングを丁寧に解き中身を確認する。

「……えっ？」

まず志保の目に飛び込んできたのは、雪の結晶の形をした銀色の物体。

それは直径7〜8ミリメートルの円の中に納まる程度の大きさ。きっと遠目では、アスタリスクのような形をしていることしか分からないだろう。しかし、近くで見れば中心に六角形があることなど、割と細かく作られていることが分かる。

次に目についたのは、結晶の頂点の一つと小さなリングで繋がっている、直径約3ミリメートル、ラウンドカットの水色の透明な石。主にこの二つで構成されているのはピアスだった。シャフトを摘んで持ち上げてみると、水色の石の下で雪の結晶が輝きながら小さく揺れた。

「……」

志保はこれを受け取ってしまっって良いものかと考え込んでしまった。

「あまり、好きじゃない？」

その声で急いで顔を上げた志保の目に、不安そうな新一の顔が飛び込んできた。

「そんなことないわ。でも、どうしてこれを？」

志保は、どうしてピアスをプレゼントしてくれたのかが知りたかった。

「お前に似合うと思ったから、これにしたんだ」

だが新一は、志保の質問をどうしてこのピアスを選んだのか聞きたいのだと受け取って答えた。

「ほら、二週間ぐらい前、歩美たちが雪の話で盛り上がってたろ？」
「ああ。あの凄く寒かった日？」

「そう。その時雪って聞いて、なんとなくお前と雪って似てるなって思ったんだ。それで、あの後一人になって帰りながらじっくり考えてみたら、本当に似てると思った」

そう話す新一の顔が、志保には得意そうに見えた。

「どこが似てるって言うのよ？」

「教えてやっから、よく聞けよ？」

やはり得意そうな顔の新一を見て、志保は少々呆れたが、黙って聞くことにした。

「雪ってさ、突然目の前に降ってくるんだ。儚いくせに、凄く存在感があつて……。俺なんて、ハラリと一片舞っただけで、空を見上げて確認しちまう」

新一は、言いながら空を見上げる真似をした後、志保を見た。

「お前もそう。突然俺の目の前に現れて、強烈な存在感を示した。」

ま、あの時のお前は最悪だったけど、それはもういいんだ」

志保は、自分でも最悪な第一印象を与えただろうと思う。でも今、目の前に居る新一は微かに笑っている。

「で、雪は、舞い降りた瞬間は冷たいんだけど、人の温かさに触れれば溶けるんだ」

新一は自分の手の平を見た。

「俺、手に当たって溶けてく雪見てると、ただ溶けてるんじゃないかって、俺の中に溶け込んできてるように感じるんだ……」

（だからお前も、俺に……）

思いを認められていなくても、それは自然と溢れてくる。だがその思いは口にせず、新一は志保に視線を戻した。

「お前のこと、最初は冷たいヤツだと思ってたけど、本当は人の温かさに慣れてなくて、まだ溶けきれてないだけなんだって思う。俺は、そんなお前と舞い降りたばかりの雪が似てると思った。だから、似てるから似合うかなって」

そう言って新一はニッと笑った。

「……悪かったわね。どうせ冷たいわよ」

志保は敢えて“冷たい”という部分だけを拾い、素っ気なく言い放った。

だけど本当は、新一が自分の事を考えてピアスを選んで、プレゼ

ントしてくれたということが嬉しくて、油断したら泣いてしまいうだった。

「お揃いのピアスじゃないけど、もう一度願掛けしようぜ。幸せになれるようにって、願掛け」

真剣に言う新一に志保は目を見開いた。もう声なんて出せない。

（私なんかが話したこと、ちゃんと覚えていてくれたのね……）

嬉しすぎて、ついに志保の瞳から雫が落ちた。

「えっ、あっ、おいっ。なんで泣くんだよっ？」

普段、あまり感情を曝け出すことがない志保が泣いているという事実が、泣かせたかったわけじゃない新一を慌てさせる。

（泣くほど気に入らなかったのかっ？）

冷静さを失った新一は、見当違いなことを考えていた。志保は下を向き、両手で顔を覆っている。

「おい、泣くなって……」

新一は困惑していたが、志保の頭を数回撫でた。すると志保は涙を拭う動作をした後、顔を上げて新一を見た。

「ありがとう、工藤君」

まだ涙のあとの残るその顔は、鮮やかに微笑んでいた。

（よかった。気に入らなかったわけじゃなさそうだ）

自分の見当違いに気付いた新一も微笑んだ。

「おう。気に入ってくれたか？」

「ええ、とても」

「それなら、早くつけてみろよ？」

「そうね、鏡……。あっ、ついでに顔洗ってくるわ」

ピアスを持って洗面所へ向かった志保の後を新一がついていく。

「どうしてついてくるのよ？」

「早く見てーんだよ」

「はいはい」

志保は耳に髪を掛けて顔を洗った後、ピアスをつけはじめた。

ホールにシャフトを通しキャッチで留める。

ほんの数秒の、ただそれだけの動作が、新一には妙に艶めかしく見えて心臓が跳ねた。

「ど、どうだ？」

新一はつけてみた感想を聞きたくて、吃りながらも問い掛けた。
ピアスをつけた後、黙って鏡を見ていた志保が、横に居る新一の方へ振り向いた。すると志保の両耳で雪が小さく舞うように揺れる。

「……似合う？」

志保は鏡を見ながら、可愛らし過ぎて自分には似合わないのではないか、と考えていた。

「うん、とっても似合ってると思う」

不安そうに問う志保に、新一は笑顔で答える。

「本当に？」

「本当に似合うよ」

志保は新一の目を見て瞬時に真意を探る。そして、今の言葉に嘘偽りは無さそうだと判断した。

「……ありがとう」

志保は少し照れて頬を染めたが、微笑んで礼を言った。

（綺麗だ……）

それを見た新一の心臓がまた跳ねる。

（抱き締めたい……）

認めたくない思いが出口を求めるように新一の体を動かそうとする。それでも新一は、勝手に動こうとする腕や脚の動きを封じ、もう一度聞いた。

「それで、つけてみた感想は？」

似合っていても、志保が気に入っていなければ意味が無い。たぶん気に入ってくれたのだろうが、何度でも確かめたかった。問われた志保は少し考える仕草をした後、表情を一変させた。

「貴方にしては、センスが良い物を選んだわね」

その顔は、新一が見慣れたいつもの表情。その声は、聞き慣れたいつもの喋り方だった。

「……お前、素直じゃねーな」

（ついさっきまでは素直で可愛かったのによ）

と、心の中で付け足した。

「素直って何？ 私、そんな単語知らないわ」

志保はすっかりいつもの調子に戻り、軽口を叩いた。

「うわっ、マジ可愛くねーっ！」

そう言いつつ、こんな感じの会話にも新一は好感を持っていた。

「可愛い？ それも知らないわね」

志保は肩を竦めると、新一に背を向け洗面所を出ていく。

（ありがとう）

なかなか素直になれず、心の中でもう一度礼を言う志保の口角が

上がっていた。

11 プレゼント（後書き）

このピアス、実際に昔売られていて個人的に凄く気に入った物なのですが、「何この説明文、意味不明。どんな物かも可愛らしさも伝わんねーよ」と、若干凹みました。結局、開き直ってこうして晒しました。皆様は自分好みのピアスに脳内変換して下さいねー。

ああ、何故こんな書きにくい物を……。でも私はコレが好き（TO T） 「雪が溶け込んでくる」というイメージは、私が子供の頃感じたものです。書いているうちに思い出し、ここで使っちゃいました。今ではすっかり汚れてしまった大人ですが、あの頃はピュアでした……。

12 約束（前書き）

明けましておめでとうございます。予想通り年が明けてしまいました。が、もうしばらくお付き合い下さいませ。

12 約束

二人ともだいぶ酔ってきていた。それもそのはず、時刻はすでに午後十一時を過ぎていた。

今は洋酒に飽きて、しつとりと日本酒を楽しんでいる。

「不思議よね」

空っぽの猪口を弄びながら志保が呟いた。

「何が？」

「貴方と、こうして元の姿でお酒を飲んでいるのがよ」

「確かに。なんか夢見てるみてーだな」

志保はよく冷えた徳利を持ち上げ、弄んでいた猪口に中身を注ぐ。

「そう。これは夢よ」

言いながら猪口を両手で持ち口元まで持っていくと、言い終わると同時に一気に流し込んだ。

「夢は、もう醒めるの。もうすぐ、貴方も私も消えるわ……」

再び猪口を弄びながら呟く志保の横顔が、新一にはとても寂しきうに見えた。

「消えねーだろ、俺もお前も」

「消えるわ。工藤新一も、宮野志保も。薬の効果がなくなれば、消える」

「……そっか。だったら、幼児化しちまったらすぐ薬飲もうぜ。試作品、まだあるだろ？」

それでは根本的な解決にはならないことは新一にも分かっている。でも志保の寂しそうな顔を見ていたくなって、こんな提案をしたのだ。

だが、志保は表情を変えず、ゆっくりと首を左右に振った。

「残ってないわ。それに、夢はいつか醒めるの。薬があったとしても、私は飲まない……」

やっと新一の方を見た志保の顔は、やはり寂しそうだ。

「寂しいか？」

新一が思わずそう聞いてしまうような表情。

「少し、寂しいわ……」

酔いのせいかな、志保はいつもより素直に感情を口にした。

新一は先程までウダウダ考えていたことを今は一切忘れ、残り少ないこの時間を精一杯楽しむことにした。自分が楽しんでいなければ、きっと志保も楽しめないだろうと思ったからだ。

「じゃあさ」

新一は笑顔になり、左手で志保の右手を掴んで立ち上がった。そ

して手を引き志保を立たせた。

「何よ？」

「いいから」

志保の手を引いてツリーの前まで来た新一は携帯電話を取り出した。

「写真撮ろうぜ」

「えっ？」

「そんなに寂しいんなら、写真に残しておけばいいじゃん。なっ？」

「何言ってるのっ？ そんなもの残しておいて、誰かに見られたらまずいわよっ？」

「大丈夫だって。いつも心配し過ぎなんだよ、お前は」

新一は志保の意見など軽く受け流してカメラを起動し、右腕を伸ばして画面に二人とツリーが入るように調節する。

「あれ？ 意外と難しいな」

腕の高さを変えたり角度を変えたりしてみるものの、なかなか上手くいかない。

「ツリー全然写んねーや」

それでもまだ諦め切れずに位置を探す。そんな新一に抵抗を諦めた志保が提案する。

「ねえ、試しに撮ってみれば？」

「そうだな」

適当に撮って、二人で画像を確認する。

「オーナメントは少し写ってるけど、やっぱツリーは無理か。うーん、いまいちクリスマスっぽくねーな……」

「ねえ、クリスマスっぽさって必要？」

「必要に決まってるだろう。今夜の、クリスマスイブの思い出なんだからっ！」

力説する新一が妙に子供っぽく見えるのは、きっと自分だけじゃないだろうと志保は思う。

「あっ！ いいもんがあるっ！」

新一は眠っている有希子に忍び足で近付き、被っているサンタ帽を引ったくった。そして志保の元へ戻ると、それを強引に志保に被せた。

「ちょっと何するのよっ？」

「これで、どっからどう見てもクリスマスだろ？　じゃあ撮るぞー」

志保の抗議を無視して、さっさと一枚撮影した。

「うん、クリスマスっぽい。でも……。まいつか、とりあえず保存つと。ほら、こんな感じ」

新一は志保に画像を見せた。そこには正面を向き歯を見せて笑う新一と、そっぽを向き不貞腐れた顔をした志保が写っていた。

「お前、笑えよ」

「やることがいきなり過ぎるのよっ！　これは貴方の方が似合うわっ！」

志保はサンタ帽を脱ぐと、仕返しとばかりに新一に荒っぽく被せた。

「痛っ！　んな被せ方すんなっ！」

「……何言ってるの、貴方の真似よ？」

志保はクスクスと笑っている。

「あー、俺が悪かったよ。んじゃ次撮るぞ。ちょっと位置変えるか」

すると新一は志保の後ろに立ち、志保の右肩の上から顔を出した。そして右腕を伸ばして画面を覗いた。

「ちょっと近過ぎない？」

互いの息遣いがはっきりと分かる距離。

「まあな。でもこうした方が構図がいい気がしたからよ」

「何それ」

いつもなら呆れるところだが、今の志保はクスツと小さく笑う。

「よし、もっと笑えっ！」

新一がシャッターを切った。

「ほら見ろ。さっきよりいいのが撮れたぞ」

今度は二人ともにつこりと写っていた。

「お前さ、こうやって笑ってると綺麗だし可愛いんだから、普段ももうちょつと笑えよ」

画面を見たままの新一が思ったままにそう言うのと、志保の顔が少し赤くなり、下を向いてしまった。

（バカッ。人の気も知らないで……）

このままもう一枚撮ろう、なんて言っている新一を横目に見て、無性に腹が立ってきた志保は報復を企てた。

「ほら、前向けよ」

そう言われ志保は一旦顔を上げ前を向いたが、新一がシャッターを切る直前に右を向き。

ちゅっ。

「ん？」

新一は、今起きたことが把握できていなかった。ほんの数秒、温かくて柔らかい何かが左頬に触れた。でもそれが何かはわからなかった。

「お前、何した？」

「自分で確かめてみたら？」

志保は新一の右手に握られていた携帯電話を取り上げ一歩離れると、よく見えるように新一の顔の前に突き出した。

「……へっ？」

新一はかなり間拔けな声を出した。画面に映し出された自分の左頬に、志保がキスしていた。

「えっ？ あっ。ええーっ！」

新一は大声で叫び、左手でキスされた辺りを押さえた。叫んだ後は声を出せずに口をパクパクさせている。勿論心臓はこれでもかと全身に血液を送り出し、顔が真っ赤になっている。

志保は新一の反応に大満足して笑顔になった。

「フフッ。これのお礼よ、サンタさん」

そう言って耳を出してピアスを見せた。

「お、お礼ってな……」

新一はなんとか声を出したが、顔はまだ赤いまま。

「嫌だった？」

「全然、嫌じゃないけど……」

本当に嫌がっていない。その証拠に、返してもらった携帯電話を握る新一の右手が、今の画像を即保存していた。

「いきなりこんなことされたらビビるって。まあ、いいけど……」

ようやく顔色も回復した新一は、携帯電話をポケットに戻そうとした。その時、時刻が目に入った。

「あつ。もう十二時だ」

それは今の二人の姿が、もうすぐ消えることを意味していた。まだ夢から醒めたくない二人の間に沈黙が流れる。しかし、沈黙はすぐに破られた。

「なあ」

「何？」

二人は向き合い、見つめ合う。新一はサンタ帽を被ったままだが、本人は至って真剣だ。

「また来年も、ここで一緒にクリスマスパーティーやろうぜ」

「えっ？」

「来年は、組織ブツ潰して、試作品じゃない解毒剤飲んで、お互いこの姿になってやろう」

「……うん」

志保は小さく頷いた。

「じゃあ、約束な」

新一は小指を立てた右手を前に出した。志保は少し躊躇ったが、同じように右手を出し、新一の小指に自分の小指を絡ませた。

「約束、破るなよ」

「貴方こそ」

二人の小指が名残惜しそうに離れた。

「工藤君、そろそろ帰ったら？」

「ん？」

「着替え、隣でしょ？ それに、どうせ夢から醒めるなら、葉が切れて苦しくなる前、今のうちに自分で醒めたほうがいいわ」

新一から目を逸らし、寂しさを隠すように素っ気なく言う志保。

新一はそれを見て襲ってくる切なさを押さえ込みながら、被っていたサンタ帽を掴み取り、再び志保に被せた。そして帽子の上から志保の頭を手の平でポンツと軽く叩き、そのまま手を置いた。

「……何よ？」

新一の行動に文句の一つでも言ってやろうと反応した志保を、新一は優しい瞳で見つめていた。

「じゃあ帰るよ。またな、宮野志保サン」

新一は志保の頭をもう一度手の平で軽く叩いた。文句を言う気が失せた志保は、再会の願いを込めた瞳で見つめ返した。

「またね、工藤新一くん」

互いの姿を目に焼き付けるように数秒間見つめ合った後、新一は志保に背を向け、振り返ることなく阿笠邸を後にした。

こうして二人は、たった数時間の夢から醒めていった。

12 約束（後書き）

長っ！ 今までで一番長くなっちゃいました。だが反省はしてない（嘘です、してます）。なんかイマイチ盛り上がりがない、ですかね？ やっぱ09で志保に邪な考え実行してもらえば良かったかな。でもそうなると葛藤だらけで、まるで東○テレビ制作の昼ドラのようなドロドロした物に……。要年齢制限になってしまいそうなので自粛しましたが。見ているだけならドロドロしたのも好きですけどねー。以下、お知らせです。一通り返信を終えたので評価欄を公開しました。書き込みしていただいた皆様、本当にありがとうございます。

13 その理由

工藤邸へ戻った新一は、自室に入るとすぐに幼児化してしまった。再び子供服を身に纏い、ベッドに体を投げ出した。

「ああー、だりいー」

急激な伸縮と酒の所為で体が重く感じられ、思わずそう言った。しかし、一番重く感じられるのは心だった。

「約束、しちまった……」

コナンは仰向けになり、天井を睨み付けた。

そもそもコナンが例の可能性を探ろうとしたのは、それが自分の勘違いだと思っていたからだだった。だが、自分の心と向き合えば向き合うほど、可能性を肯定しなければならいことになっていった。

「……何逃げてんだよ、カッコわりー」

睨むのを止め、そっと目を閉じた。そして、今までのことをゆっくりと思い出す。

（本当、夢見てたみてーだ……）

それはつい先程までのこと。夢のようだが、確かに存在した時間。

（ピラス……。まさか泣かれるとは思わなかったぜ。でも、笑ったら綺麗だったな。なんかいつもより素直で可愛かったし）

コナンの脳裏に、頬を染め、微笑みながら礼を言う志保が甦る。すると鼓動が徐々に加速する。

（抱き締めたかったんだ……）

そう思った途端、コナンは寝たまま枕を掴み、ギュッと抱き締め、左右に転がる。その動きを数回した後、ピタッと止まった。

「何してんだよ。バカみてえ」

自分の行動にツツコミを入れるが、枕は離さない。

「お前も、俺に溶け込んでほしい。俺も、お前に溶け込みたい」

言えなかった望みを口にした。

（お前のことが知りたい。俺のことを知ってほしい）

そう。知りたいだけではない。自分のことを知って、もっと近付いてほしいのだ。だけど、まずは知りたい。

（アイツは、何が好きなんだろう？）

コナンはそれをまだ知らない。だから記憶を辿りつつ想像してみる。

（酒は特に好きってわけじゃないって言ってたよな）

これは先程志保本人が言っていたこと。

（子供は好き……かな？　なんだかんだ言っても、少年探偵団に参加してんもんなー。たまにパスするけど）

でもこれでは子供好きとは特定できない。

（子供好きってより、友情かも）

それでも、彼女なりに子供たちを大切に思っているのだろうと想像できた。

（動物は好きそうだ）

これは過去のデータと照合した結果導き出したもの。

（アイツ、犬には簡単に笑顔見せてやがったし。俺には見せてくれないのに）

コナンの顔が不機嫌そうに歪む。

「なーんかムカツク」

思わず声に出してしまう。

「あとは……、好きな男って、居るのか？」

そこで、元の姿をほとんど見たことが無かった時には思いもしなかったことを思い付く。

「実は恋人が居る、なんてこと、無い……よな？」

コナンの、数時間共に過ごした志保の外見に対する印象は。

（スタイルは悪くなかったな。顔は元々整ってるし、灰原の面影はあった。けど、大人になると……）

そして、からかわれた時に間近で見た志保の妖艶な笑みを思い出
し、コナンの顔が赤くなる。

「あれは、色っぽかった……」

こうして元の姿をしっかりと見てみると、組織の監視下でもそれ
なりに男と縁がある生活をしていたのではないかと思える。

「ま、まあ、十八だし、男の一人や二人は……」

自分に言い聞かせるように言うコナンの顔が引きつっている。

「だーっ！」

コナンは体を起こし、枕を壁に投げ付けた。

「すんげえムカツクッ！」

頭に血が上り、呼吸が乱れる。

「ハア、ハア……。何してんだよ、マジで……」

これがヤキモチだということは、コナンにも分かっている。

「もう認めるよ、新一」

コナンは胡坐をかき、両手をそれぞれ膝の辺りに置いた。そして一度深呼吸をした後、背筋を伸ばし目を閉じた。

（こうやって嫉妬するのも、さっき約束をしたのも、何気ない会話に安らぎを感じてしまうのも、色々知りたいのも、笑わせたいのも、アイツのことを考えると心臓がこんなことになるのも……）

コナンは早鐘を打つ胸に手の平を当てた。

（全てが同じ理由なんだ。その理由は……）

もう一度、深呼吸をした。

「好きだから。俺は、灰原哀が好き。宮野志保が好き」

そう呟いても違和感なんてものは無い。コナンは目を開いた。

「間違い、ねーや……」

さんざん拒絶してきた心を受け入れた途端、コナンの全身に幸福感が広がる。そして、思いは溢れる。

「会いてーな……」

顔が見たい、声が聞きたいと思ってしまう。

「って、さっきまで一緒に居たじゃねーか。でも……」

コナンはそれでも会いたいと思う自分が恥ずかしくなった。

「いや待て。さっきまで会ってたのは志保だ。俺が今会いたいの
は灰原だよな、うん」

恥ずかしさを紛らすために、苦しい言い訳を試みた。

「……バカか、俺は。志保も灰原も同一人物だろうが」

無理がありすぎて、自分でツツコミを入れる羽目になった。

「情けねえ……。こんなに惚れてんのに、認めないどころか、つい
この前まで気付いてすら無かったんだぜ？ 自分でも呆れる……」

コナンは大きな溜め息を吐き、頭を抱えた。

「好きだ……。でも、まだ言えねーよな……」

思いを伝える前に、考えなければ、解決しなければならないこと
がある。それは、組織のことだったり、蘭のことだったり……。

「つたく、前途多難だな」

それでも、顔を上げたコナンの表情は明るかった。

コナンは眠るためにベッドに潜り込んだ。

（アイツ、もう寝たかな？）

だけど、愛しい彼女のことを考えてしまい、なかなか寝付けない。

（それにしても、いつ惚れたんだろう？）

記憶を辿ると、以前からその兆候はあったように思える。しかし、それがいつだとは断定できない。

（よく分かんねーけど、惚れてんだよな）

その事実に変わりはない。

（やっぱ会いてーな……）

彼女のことを考えていると会いたくなる。そしてまた考えてしまう。

そんなことを何度も繰り返しているうちに夜は更け、いつの間にか眠りへと落ちていった。

13 その理由（後書き）

コナンが若干コワれてしまいました。恋に落ちると誰でも多少コワれるものですよね？ 恋の病なんて言葉があるくらいですから。やっところまで来ました。次が最終話です。

14 夢の続き

翌日。

昨夜なかなか寝付けなかったコナンは昼過ぎに目を覚ました。

（会いてーな……）

眠る前と変わらず、そう思っている。

寝不足の所為でベッドに張り付こうとする体を引き剥がすように起き上がると、ぼんやりとしたまま身支度を整えた。

「おはよっ。随分遅くまで寝てたわね」

起きてきたコナンに気付いた有希子が声を掛けた。

「おーう」

しかし、コナンは心ここにあらずといった感じで生返事をした。

「新ちゃん、具合悪いの？」

そんな息子を母が心配しないわけがない。

「あー。俺、出掛けるから」

それでもコナンは相変わらずで、言いたいことだけ言ってさっさと出ていってしまった。

「もしかして、やっと気付いた？」

コナンの後ろ姿を見送った有希子は、そう呟いた後ニヤニヤした。

コナンは惚けたまま阿笠邸の前までやって来るとインターホンを鳴らした。

「あれ？」

しばらく待ってみるが反応が無い。もう一度インターホンを鳴らすと玄関の扉が開いた。

「何か用？ 博士なら二日酔いで使い物にならないわよ？」

コナンが挨拶をする間も無く、哀が扉に手を掛けたまま面倒臭そうに言った。

「用ってわけじゃねーけど……」

コナンとしては、ただ哀に会いたくて来たただけだ。だが、それを正直に言えるはずが無かった。

「じゃあ何？」

哀は益々面倒臭そうに顔をしかめた。

「なんだよ？ 俺が来たら迷惑だって顔して」
「別に」

やっと会えた哀にこんな顔をされたら、コナンの心は少なからずダメージを受ける。

「用が無きゃ来ちゃいけねーのかよ？」

「そうは言ってないでしょ」

「じゃあ邪魔するぜ」

コナンは溜め息を吐く哀の横を擦り抜け、さっさと上がり込んだ。

コナンが室内に入ると、洗いかけの食器類が目に入った。

「あつ、悪い。途中だったのか」

「ええ、そうよ。昨夜使ったグラスが多くて大変なの。なのに、途中でわざわざ手を洗って玄関まで行ったのよ」

哀が面倒臭そうにしていた原因はこれだったようだ。

「だから悪かったって。俺も手伝うよ」

コナンは腕まくりをして、作業を再開した哀の隣に立った。

「割らない？」

「大丈夫だ、たぶん……」

コナンの顔は相当自信が無さそうだった。

「そう。お願いだから手を出さないで」

「……はい」

コナンは仕方なく哀から少し離れたが、疑問に思ったことがあった。

「なあ。どうして今頃昨夜の物洗ってんだ？」

普通なら午前中に済ませてしまっているだろう。

「一時間前に起きたの」

哀は作業を続けながら答えた。

「そっか。実は俺もまだ起きたばっかなんだ」

コナンが一つ欠伸をした。

「まだ眠そうね」

「お前は眠くないのか？」

コナンはもう一つ欠伸をした。

「昨夜は良く眠れたの。良い夢を見た後だったから、かもしれないわね」

哀が手を止め、コナンの方へ振り向いて微笑んだ。
それを見ただけでコナンの心臓が騒ぎ、眠気を吹き飛ばした。

「確かに、昨夜のあの時間は夢みたいだった。だけど、あれを夢だ
って言うんなら、俺は夢の続きが見たい」

「続きね……」

哀は視線を手元に戻し、食器類を濯ぎ始めた。

「工藤新一と宮野志保の姿を取り戻すことが、続きを見ることになるだろ？ だから俺は、近いうちに必ず続きを見てやる」

「そんなの、見られる日が来るのかしら？」

コナンはずっと哀を見つめているが、哀は手元を見たまま作業を続けている。

「来るよ。続きを見たいと思ってれば必ず見られる。お前は、見たいと思わないのか？」

哀の視線はそのままだが、手が止まった。

「そうね、私は」

哀は目を閉じた。

「夢の続きを見るのなら、その時は……」

コナンは静かに次の言葉を待っていた。しかし、哀は目を開き、無言のまま作業を再開した。

「その時は？」

その続きを知りたくてコナンは聞いた。それに対して、哀はゆっくりと首を左右に振った。

（その時は、貴方と手を繋いでいたい。なんて、言えないわよ）

しばらく食器類を濯ぐ音だけが響いた。

コナンは、哀の様子から続きを知るのは難しそうだと判断し、話題を変えることにした。

「ところで、ピアスどうした？」

ようやく作業を終えた哀は、コナンの方へ振り向き両耳に髪を掛けた。無言だったが、それが答えだった。

「無くすなよ？」

コナンは自然と笑顔になった。

「昨日の今日で無くしたなんて言ったら、さすがに怒るでしょ？」

「そりゃそうだ。願掛けなんだから、ぜってー無くすな」

「わかったわよ」

哀はわざと怠そうに答えたが、コナンは真剣な顔で哀を見ている。

「無くさなきゃ大丈夫だから。願いは叶う。ちゃんと幸せになれるよ」

「そうなれば、いいけどね……」

コナンの強い意志を感じる瞳に、哀は圧倒された。

「なるよ、絶対に。俺が見届けてやるよ、お前が幸せになるのをな」

その時、インターホンが来客を知らせたため、そこで話が終了した。

二人は、あの日コナンが哀のピアスホールに気付いた公園に連れ出されていた。

先程の来客は少年探偵団の三人だった。昨日は室内だったから今日は外で遊ぼうと誘いに來たのだ。

「また鬼ごっこかよ」

コナンは、サッカーをしようと提案したのだが、それではコナンの一人勝ちだと三人に即却下されてしまった。だから全くやる気が出ない。

「じゃあ最初は歩美が鬼ねっ！」

じゃんけんで負けた歩美がやる気満々の顔でそう言うのと、残りの四人は方々へ散った。

しかしコナンは一分もしないうちに捕まって、四人の様子を、正確には哀の動きを目で追っていた。

（灰原のヤツ、今日は逃げ回ってんじゃん）

哀は、この前は長時間待たされて寒かったので、今日は少しだけやる気を出していた。それでも、やはり逃げ回るのは面倒だったよう。

「つつかまーえたっ！」

歩美は哀の肩を元氣よく掴んだ。その時、ある物が目に付いた。

「あれっ？ 哀ちゃん、これどうしたの？」

歩美の視線の先にあったのは、髪の間からチラリと覗くピアス。二人の様子に気付いた元太と光彦が歩美の両隣に駆け寄る。

「歩美ー、どうしたんだー？」

「どうかしましたか？」

哀は三人が見やすいように横を向き、耳に髪を掛けた。すると、少し離れた場所に居るコナンとほぼ正面で向き合う形になった。

「このピアスは、昨夜素敵なサンタさんに貰ったの」

哀は三人を横目に見て、微笑みながら言った。

（そうやって、もっと笑っててくれよ）

そんな哀を見て、コナンは幸せな気持ちになった。

ピアスを見ながら話している三人を見ていた哀が、視線をコナンに向けた。

「ん？」

哀は声を出さずに何か言っている。コナンは哀の唇の動きから言葉を読み上げた。

（ありがとう、サンタさん……？）

コナンは確認のために、同じように唇を動かしながら哀を見た。

コナンの唇を読んだ哀の表情が満足そうなものに変化した。そして三人に気付かれないよう、コナンに正解だと言うようにウィックをして見せた。

（うわっ、可愛い……）

コナンは眩暈がした。

（ヤバッ。俺、惚れてるなんてもんじゃねーぞ）

鼓動が加速し続ける。

（ベタ惚れじゃねーか）

もう壊れてしまいそうな心臓を心配しつつ、自分の気持ちを再認識した。

その後、五人は何度か鬼を交代しながら遊び続けた。しかし、何度やってもコナンと哀が先に捕まる。

「あの子たち、よく飽きないわね」

「本当にな」

哀は呆れたように言うが、三人を見守る表情は柔らかい。

一方コナンは、そんな哀の横顔を盗み見たり、三人の様子をぼんやりと眺めたりしながら考えていた。

（夢の続きを見るのなら、その時は……）

コナンが考えたところで、哀がその先をどう考えていたのかは分からない。そこで、自分なら何と云うだろうかと考えた。

（その時は、お前と手を繋いでいたい。なんて、まだ言えねーよな）

コナンは、すぐにでも手を繋げる距離に居る哀の横顔をそっと見つめながら、胸に秘めた思いを元の姿で向かい合って必ず伝えようと決心した。

夢の続きを見るのなら、その時は……。

実は同じことを望んでいたと、二人は近い将来知ることになる、かもしれない。

おしまい？

「あつ。腹減った」

走り回る子供たちを見ていたコナンが突然呟いた。

「えっ？」

「今日何も食ってねーや。食うの、忘れてた……」

コナンは食事をするのを忘れてしまうほど、この恋にのめり込んでしまったようだ。

「忘れてた？ 一度精密検査受けた方がいいんじゃない？」

哀はコナンの頭を指差し、突き刺さるような冷たい視線と言葉を投げた。

「ハッ、ハハッ、ハハハ……」

それを諸に食らったコナンの乾いた笑い声が、真冬の空へと吸い込まれていった。

おしまい。

14 夢の続き（後書き）

なんか雑だし、無理矢理終わらせた感じがしますが、この話はこれで一応終わりです。最終話には全員出すという密かな野望も（博士は名前だけでしたが）達成できて良かったです。妄想駄文を最後まで読んでいただき、本っ当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7220f/>

その理由

2010年10月8日12時54分発行